

## 賀川豊彦が立ち上げた 生活協同組合とその後の発展

賀川記念館

兵庫県神戸市中央区吾妻通5-2-20

生活協同組合コープこうべ

兵庫県神戸市東灘区住吉本町1-3-19  
従業員数：9,500人、組合員数：171万人

20世紀初め、神戸市葺合区新川（現中央区）に巨大なスラム街があった。300m四方の狭い地域に7,500人がどん底の暮らしをしており、その中には博徒、売春婦、すり、犯罪者などが含まれていた。21歳の賀川豊彦（1888～1960）は、1人でそこに入って、その人たちと暮らしはじめた。行き倒れの人を助けたり、栄養失調で死にかけている赤ん坊の世話をしたりした。1人5円の養育費を目当てに生まれたばかりの赤ん坊をもらい受け、それをたらい回ししているうちに栄養失調で死なせてしまうという事件が、ここでは日常茶飯事だった。そんな中で賀川は、ここから神学校に通いつつ、この中に礼拝所をつくって人々に神の教えを説いた。「神が自らの位を捨てて、ナザレの労働者イエスとして人間生活へ入り込んだというのならば、われわれが貧民窟へ入って生活するくらいは何でもないことである」と、後に彼は書いている。だが、1人が手を差し伸べても、みんなを救うことはできない。諸悪の根源は貧困であり、彼らを救い出すには貧困を生まない社会をつくるしかない。そう考えた賀川は、労働運動、農民運動に身を投じ、弱者を団結させて、世

の中を変える道を選んだ。併せて協同組合活動にも力を注いだ。彼のアドバイスをきっかけに誕生した生活協同組合コープこうべは、間もなく創立100周年を迎える。賀川記念館の取材に続いて、コープこうべを訪れ、広報室の柴田善博さんと金田宏樹さんに、生協誕生のいきさつと、その後のあゆみを聞いた。



コープこうべ広報室の柴田善博さん（右）と  
金田宏樹さん

## ■ 賀川豊彦、生い立ちから 労働運動への参加まで

賀川豊彦は1888年（明治21年）に神戸で生まれた。裕福な家庭だったが、賀川の母は、父の正妻ではなかった。4歳の時、相次いで両親を亡くし、徳島の父の実家に引き取られ、祖母と父の正妻である継母に育てられた。妾の子という立場は、少年時代の賀川にとってつらく厳しいもので、孤独な少年時代だったという。中学生時代にアメリカ人宣教師から英語を習ったことがきっかけで、キリスト教を信仰。洗礼を受け、神学校に通い、弱い者、貧しい者、人生の敗残者たちに深い同情を寄せるようになった。

だが、同情だけでは問題を解決できないと悟り、1914年、アメリカに単身留学し、労働者が団結し整然とデモ行進して資本家に対抗するのを見て、貧困から脱出するには人々の結束が重要だと考えるようになった。3年後に帰国し、労働団体友愛会に参加。友愛会神戸連合会評議員、関西労働同盟会理事長などを引き受けた。



賀川と葺合区新川の子供たち

戦争景気をもたらした第一次世界大戦（1914～1918）が終わり、ヨーロッパ各国が経済活動を再開すると、日本は大きな不



賀川豊彦肖像

況に襲われた。輸出が減り、生産活動が低下し、失業が増え、困窮した労働者は雇用の維持と待遇改善を求めて労働紛争を起こした。

1921年7月10日、神戸で川崎、三菱両造船所の労働者3万人が立ち上がって大規模なデモを起こした。賀川はその先頭に立ったが、会社側が動員した警察と軍によって抑え込まれ、乱闘のすえ多数の重軽傷者を出し、1人が死亡。首謀者が逮捕され、賀川も一時拘束されたが、証拠不十分で釈放された。

労働側の敗北に終わったこの事件のあと、労働運動は階級闘争を掲げ、同盟罷業など力に訴える主張が主流となっていった。無抵抗主義で秩序ある団体行動を訴える賀川の主張は容れられなくなり、賀川は、労働運動から次第に距離を置き、小作農に団結と自立を促す農民運動に力を入れるようになった。

## ■ 協同組合運動

並行して協同組合運動にも力を注いだ。

この数年前から各地で米騒動が起っていた。都市労働者が増え、農村の労働人口が急速に減ったことで米が不足し、そのうえに米価の高騰を見越した地主や米穀商が米を売り惜しんだためである。醤油や味噌に水や土を混ぜて量を増やして売る悪徳商人も少なくなく、人々の食生活の安全安心が大きく揺らいでいた。そこで、消費者の出資によって組合をつくり、中間の流通事業者を排除して、生産者から直接、米や味噌、醤油を調達し、組合員に販売することを推奨したのである。

1920年、賀川は大阪で西尾末広ら労働組合指導者とキリスト教会の人たちの協力を得て、購買組合共益社を立ち上げた。19世紀半ばにイギリスで結成されたロッチデール公正開拓者組合にならい、出資持ち分を制限して独占を防ぎながら、1人1票の採決権を与え、持ち分に依じて利益を配分するというものだった。

大阪では、さまざまな協同組合が誕生と消滅を繰り返した。購買組合共益社はなんとか第二次世界大戦後まで続いたものの、労働組合関係者の発言力が強く階級闘争的な姿勢もあって、それ以上は続かなかった。これに対して現在まで続き、しかも長く日本最大の生活協同組合として発展したのが、兵庫県のコープこうべである（現在はコープみらい、コープさっぽろに次いで3位）。

## ■神戸購買組合の設立

大阪の購買組合共益社が誕生した翌年の1921年、川崎造船所の職工で労働組合委員長を務めていた青柿善一郎が、賀川を訪ね、協同組合の設立について助言を請うた。安全安心の食品を労働者に供給するために川崎造船所内に消費組合をつくろうとしたが、会社はそれを認めなかった。賀川は、利用者を労働者に限定せず、広く神戸市民全体に呼びかけて組合をつくることを勧めた。そしてその後、毎週講演会を開いて協同組合への参加を呼びかけた。

その結果、1921年4月、川崎造船の労働組合員を中心とした1,500人によって、神戸購買組合が設立された。初代組合長には海運業で成功した実業家で神戸市議員だった福井捨一が就任し、賀川の自宅が組合の事務所となり、現在の神戸市中央区八幡通に店舗がつくられた。店舗では生産者から直接購入した米、醤油、味噌、酢、砂糖、木炭、足袋、ワイシャツ、脱脂綿、作業着、信玄袋などが販売された。ただし、酒類は取り扱わず、ツケも認めなかった。また、組合員宅を1軒1軒回り、注文を聞いて配達する御用聞きもはじまり、この御用聞き活動は1970年まで続いた。

## ■灘購買組合の設立

神戸購買組合の設立からしばらくして、現在の神戸市東灘区に当たる住吉村にも、



神戸購買組合



灘購買組合

灘購買組合が誕生した。住吉村は六甲山麓の風光明媚な地域で、実業家や文化人の多くがここに邸宅を建てたことから、日本一金持ちの村と呼ばれた地域である。

この村の住人で、相場師として巨万の富を得て引退した那須善治が、賀川のもとを訪ねてきた。自分は、事業で成功して大きな財産を築いた。この財産を世の中の人々の役に立つことに使いたい。どんなことをしたら人々の役に立つだろうかと、賀川に助言を求めた。「それなら、購買組合をつくったらどうでしょうか?」と賀川は言った。富裕層の多い住吉村は物価が高い。富裕層の購買力に合わせて商人たちが普通より高い値段をつけるからだが、村には一般庶民も大勢住んでいて、庶民は大きな負担を強いられている。協同組合を立ち上げて生産者から直接仕入れる仕組みをつくれれば、多くの庶民が助かりますと説いた。

賀川のこの提案を、那須は同じ住吉村のひら おはちさぶろう平生鈺三郎に相談した。平生は学校法人甲南学園の創設者で、後に広田弘毅内閣で文

部大臣を務めた人で、賀川の支援者でもあった。那須から賀川の提案を聞いた平生は「自分もロンドンで協同組合のすばらしさを体験したことがある。君が協同組合を立ち上げるのなら協力は惜しまない」と答えた。これを聞いて、那須は協同組合の設立と運営にその後の人生をかけることを決意した。那須は資産家たちの社交場だった観音林倶楽部のメンバーにも協力を求め、そのメンバーたちも協力を約束し、こうして1921年5月、灘購買組合が設立された。

## ■ 家庭会の活動

購買組合の誕生によって、顧客を奪われることに危機感を抱いた各地の小売事業者から反対の声が上がったが、その声が大きく広がることがなかったのは、家庭会の力が大きかったといわれる。

神戸購買組合の初代組合長となった福井捨一は、私費でヨーロッパ各地の購買組合活動を視察した。そのときの見聞がヒントになって、帰国後の1924年、組合員の主婦



家庭会の料理講習会

に呼びかけて家庭会を組織した。彼女らは料理講習会、布団打ち直し講習会、生活の知恵の交換会、不用品交換即売会などを開催。これらの活動に参加した主婦たちが友人知人に加入を呼びかけたため、協同組合は地域に着実に浸透していき、小売事業者の反対の声が広がらなかったのである。

神戸購買組合からはじまった家庭会は、5年後に灘購買組合でも取り入れられ、ここでも活発な活動が展開された。婦人参政権が認められる16年前のことで、家庭会は女性たちに貴重な社会参加の機会を提供し、2つの組合の活動が、他地域に例のない兵庫県独自の協同組合文化をつくりあげることになった。

### ■ 賀川豊彦のその後

1920年、賀川はそれまでの自身の半生を振り返った自伝小説『死線を越えて』を執筆。これが100万部を超えるベストセラーとなり、莫大な印税を手にした。印税のほとんどは賀川自身が関与した社会事業に投じられた。組合員に富裕層の多かった灘購

買組合の運営は順調だったが、労働者が中心の神戸購買組合は数年間赤字が続き、『死線を越えて』の印税はその赤字の補填にも投じられた。

1923年に関東大震災が勃発。賀川は生活の本拠地を神戸から東京に移し、被災地の救援に当たった。その後は社会活動から宗教活動に重点を移し、日本基督教連盟の活動として「神の国運動」を展開。伝道のために全国を巡回したほか、アメリカ、中国、ヨーロッパ各国に渡って講演活動を行った。

戦後は幣原喜重郎内閣解散後、吉田茂内閣のスタートが難航する中で、総理大臣候補として賀川の名前があがったことがある。また、1948～1956年のノーベル文学賞とノーベル平和賞の候補としても、何度か名前があがっている。

### ■ 神戸生協と灘生協の統合とその後

戦後になって1949年に「消費生活協同組合法」が成立し、購買組合はその後、生活協同組合と呼ばれるようになった。1962年には、神戸生活協同組合と灘生活協同組合が合併して、灘神戸生活協同組合となった。その5年後の1967年には組合員数が10万人を数えたが、これは全国最大規模だった。創立70周年を迎えた1991年には組合員数は100万人を超え、生活協同組合コープこうべと名称を改称した。

家庭会を通じて、常に組合員の意見を聞

- き、それを活動に取り入れてきた灘神戸生協は、特に食品の安全安心の追求に力を注ぎ、先駆的な実績をあげてきた。
- 1959年 シロップに人工甘味料を使わず、砂糖を使用したコープ商品第1号「みかん缶」が誕生。
- 1967年 無漂白小麦粉を使った食パン「コープブレッド」の製造を開始。
- 1969年 うどん、そばへの殺菌料（過酸化水素）の使用を中止し、加熱殺菌法を採用。
- 1977年 OPP（防カビ剤）不使用のレモンの輸入を開始。
- 1991年 人と自然にやさしい食べ物づくり「フードプラン」供給開始。
- 近年は、高齢化がすすみ、またコロナ禍で外出がままならない中、コープの宅配サービスを求めて、新たに入会する人が増えているという。

\*本稿の執筆に当たっては次の図書を参考にしました。『賀川豊彦』隅谷三喜男著、岩波現代文庫、2011／『賀川豊彦—時代を超えた思想家』林啓介著、賀川豊彦記念・鳴門友愛会刊、2009／『劇画・死線を越えて』賀川豊彦献身100年記念事業神戸プロジェクト実行委員会企画監修、家の光協会刊、2009／『大阪における消費者協同組合運動の展開』杉本貴志著  
([https://www.kansai-u.ac.jp/Keiseiken/publication/report/asset/sousho152/152\\_07.pdf](https://www.kansai-u.ac.jp/Keiseiken/publication/report/asset/sousho152/152_07.pdf))

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中